

障害のある児の母子関係

中村 孝 (静岡県立こども病院)

大久保俊夫, 北野 市子 (静岡県立こども病院)

林 邦雄, 松永千賀子, 渡辺なを子 (静岡大学教育学部)

母と子の心のつながりをみる方法は数多くあるが、投影法も正しく使用すれば多くの情報を与えてくれる有力な手段である。われわれは小嶋教授のつくられた「母子関係検査法」を用いて検索を行ってきたが、今回はこの検査法の基礎的研究として、こどもおよび母親の姿態が表出している内容を明らかにするためのイメージ調査を施行した。また本調査としては肢体不自由児の母親の検査を行なった。

1. イメージ調査

a. こども図版

母子関係検査法の施行にあたって、検査者はこども図版を示すのみで、これは何をしているところかとは述べないことになっている。母親に自由に発想してもらうためである。それでは一般にどのように考えられるのであろうか。大学生男女 272 名を対象として、こども図版 1 枚ごとに、1) これは何をしているところか、2) これから何を感じるかを自由筆記してもらった。たとえば図版 1 の場合 1) には、転ぶが 44%、寝ているが 20%、ついで遊ぶ、跳ねる、運動などが挙げられ、2) には楽しいが 33%、痛い、はざかしい、泣きたい、不安などは Negative な情感とすれば、この図版には Positive, Negative はほぼ等しい感じ方があることになる。

このようにして、われわれが使用している 6 図版の大学生のイメージを整理してみると、図 2 のごとくになり Positive が図 1, Negative が図 3, はほぼ等しいが図 2 ということになる。

b. 母親の姿態

同じく大学生による意味微分法 (SD法) が行なわれている。その結果、および児の図版と母親姿態との

組合せの考察は現在検討中であり、次回に報告する。

2. 肢体不自由児の母親について

本検査を肢体不自由児の母親に施行し、健常児の母親との比較を行なった。

1. 対象

母親を対象とした肢体不自由児は 20 名で、男児 10 名、女児 10 名であり、平均年齢は 4 歳 8 カ月で、独歩出来るもの 5 名、生活が自立しているもの 8 名である。コントロールとして健康な幼稚園児の母親 38 名の検査結果を用いた。

2. 方法

前回と同様である。

3. 結果

1) 母親カードの選択

6 枚のこども図版にたいしてどの母親カードが選ばれたか、選択率は肢体不自由児群、健常児群の間に差はなかった。

2) 母子間の距離

適当な母親カードが選ばれ自分の思う位置に置かれたとき、母子間の距離は物理的、心理的距離を反映していると思われる。肢体不自由児の母親はすべての児のポーズにたいして健常児の母親より近くにおいた。とくに C-5 図版、C-6 図版で差があった。合計の平均値は肢体不自由児 10.7 cm, 健常児 13.5 cm であり 1% の危険率で有意であった (図 3)。

3) 母子関係の知覚

この検査は母親カードを置き何か話をしてもらうことになっている。そのストーリーの内容が母から子への働きかけ (M→C) か、子から母へ (C→M) か、などをみるものである。肢体不自由児では健常児と同様に (M→C) が多いのであるが、(C→M) が少ないこと、(M・C) 母子が別々で相互作用が

ないストーリーがあることが一つの特徴と思われた(図4)。

4) 母親行動

これもストーリーから分析される。母親の言動から、親和、寛大、支配、攻撃、拒否、不明、叙述、欠如に分類する。評定は数人が別個に行ない一致しない例は合議して決めるという作業をした。ここでは肢体不自由児と健常児の母親に差はなかった。

5) こどもの母親に対する態度

ストーリーの児側の言動を分類し、親和、依存、攻撃、拒否、不明、叙述、欠如とする。図4のごとく肢体不自由児と健常児との間に大きな差はないが、叙述と欠如をあわせた数で肢体不自由児群が有意に多かった(図5)。

4. 考察

以上健常児を対照とした肢体不自由児の母親の母子関係検査では、母親カードの選択には差がなく、母子間の距離が近いという結果であった。母子間の

距離は、精神発達遅滞児、ダウン症児、自閉症児では遠いといわれ、われわれの入院児では例数が小さいが近くなる傾向があった。肢体不自由児の母親は児の近くにあつて身体的障害の介助をしたいという気持ちが強いのであろう。しかし、ストーリー分析からみると母子関係の知覚では(C→M)が少なく(C・M)が出現し、母親行動は差がなく母親は正常に振る舞っているが、こどもの親に対する態度では、児の意志のない叙述、欠如が多くなる。母親の働きかけにたいして、こどもは反応せず、ときに無関係であり、母親側からの一方通行あるいは母親主導型母子関係であることが示されているようである。

投影法と自由筆記に近いお話をつくるという方法で母子相互作用を求めているが、精神発達遅滞児、自閉症児では母親は離れて立ち、肢体不自由児、入院児で接近するようである。なぜか、その辺をもう少し調べてみたいと考えている。

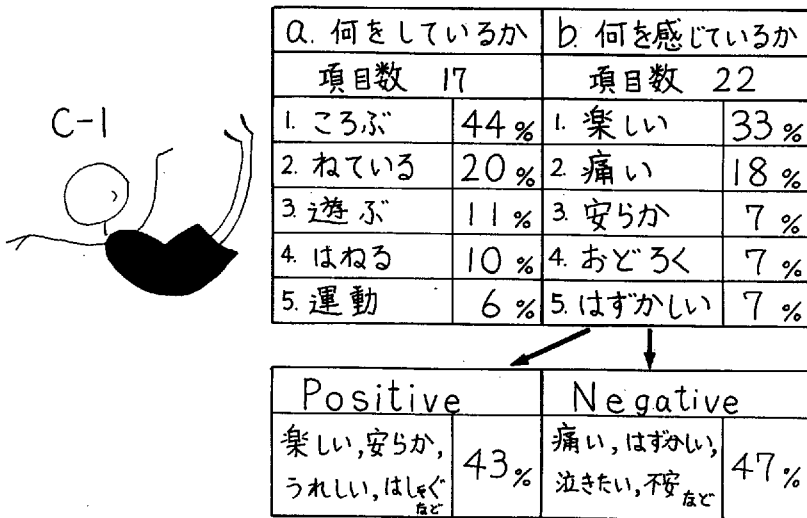


図1 こども像のイメージ


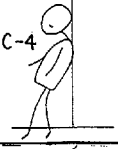
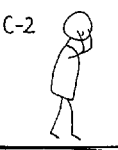
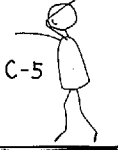
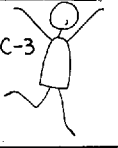
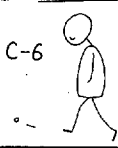
子ども図版	各国版の傾向	子ども図版	各国版の傾向
C-1 	a. ころぶ, ねている, 遊ぶ, b. $P \doteq N$	C-4 	a. よりかかる, 壁にもたれる, 人を待っている. b. Negative
C-2 	a. 泣く, 悩む, b. Negative	C-5 	a. なげる, たたく, あどる, b. $P \doteq N$ a.b.共に項目数多い
C-3 	a. とぶ, よろこぶ, はいる, b. Positive	C-6 	a. 石をける, あるく, 帰る, b. Negative

図2 子ども像のイメージ

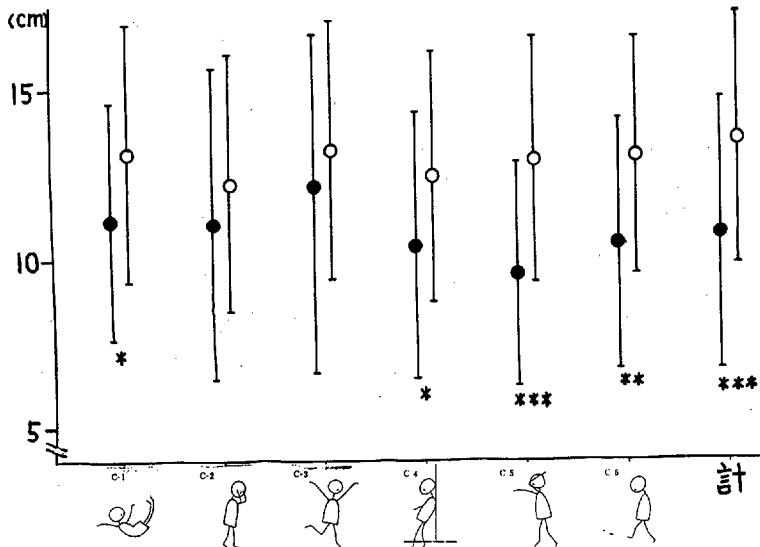


図3 母子間距離の比較 (t) ● 肢体不自由児群, ○ 健常児群
(* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$)

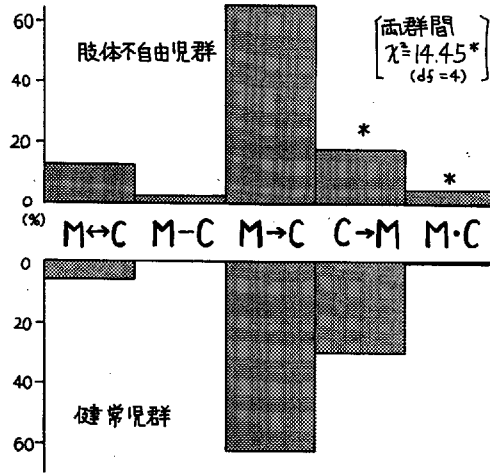


図4 母子関係の知覚 (* p < .05)

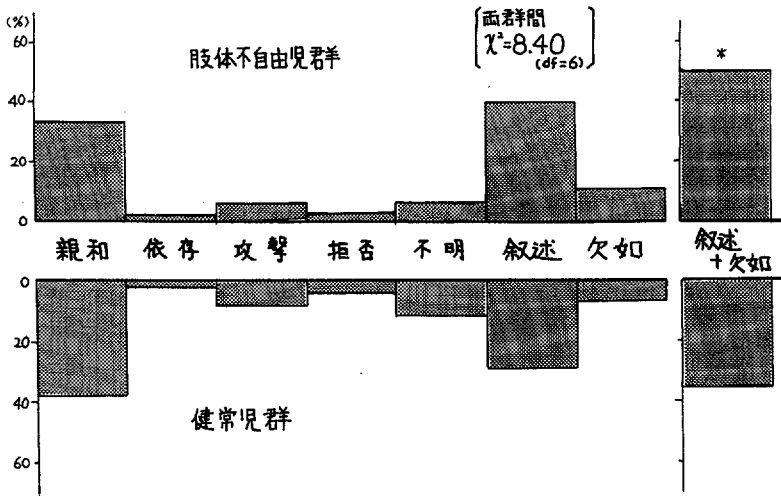


図5 子どもの母親に対する態度 (* p < .05)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



母と子の心のつながりをみる方法は数多くあるが、投影法も正しく使用すれば多くの情報を与えてくれる有力な手段である。われわれは小嶋教授のつくられた「母子関係検査法」を用いて検索を行ってきたが、今回はこの検査法の基礎的研究として、こどもおよび母親の姿態が表出している内容を明らかにするためのイメージ調査を施行した。また本調査としては肢体不自由児の母親の検査を行なった。